

談話場面における相づちの変化

－日韓兩言語の母語場面と接触場面を比較した場合－

郭 末 任*

目 次

1. 談話における相づちの側面
 2. 談話参加者の相づちに關する意識
 3. 本研究の目的
 4. 談話データ及び収集方法
 5. 本研究における相づちの定義
 6. 分析の結果
 - 6.1 母語話者による發話の受け止め
 - 6.2 ミスコミュニケーションの修復
 - 6.3 母語話者のフォロー
 7. まとめ
-

1. 談話における相づちの側面

和辻(1937)は人と人との間で話される言語は情報伝達の側面だけではなく、人間關係において考察しなければならないという考え方を示している。談話も情報提供の側面と人間關係を作っていく側面に分けることができる。そして、ほとんどの談話でこの2つの側面が同時に進行している。相づちはこの2つの側面のなかで人間關係を作っていく機能を担っている。吉田(1995)は外國語の構造的な知識だけではコミュニケーションが十分できるようにはならない。外國語の構造的な知識以外とは、それぞれの言語の裏にある文化的・社會的背景に基づいている場合が多い。したがって、その文化や社會のなかでの「意味」や「意図」が理解できなければ、本當の意味でのコミュニケーションはできないとしている。長年、異文化間コミュニケーションを図るため、語彙や文法を學んできた者が、最終の目的であるコミュニケーションの際に、相づちの「意味」や「意図」による誤解が生じてしまうのは、實に惜しいことである。學習者

* 東亞大學非常勤講師

が相づちによる戸惑いを経験する前に、母語話者はどういう話し方、どういう相づちの打ち方をしているかを知るの大切であろう。

2. 談話参加者の相づちに関する意識

さて、母語話者の相づちに対する意識はどうであろうか。マイケル(1989)によると、母語話者は事前のリハーサルなしに、予期しなかった発話や場面に即時即答し流暢さを失うことなく談話を維持していくことができる。が、母語話者本人はこのような母語における極めて高度な言語能力を意識していないと指摘している。また、水谷(1993)は、相づちを打つことについて日本人自身はほとんど気が付いてないとしている。このようなマイケル(1989)や水谷(1993)の指摘から推察すると、本研究の談話に参加してくれた母語話者も無意識の状態相づちを打ち、その場に即答し応じることができたと考えられる。それを検証するため、談話参加者にフォローアップインタビューを行い、相づちを意識しているか否か尋ねた。母語話者は日本語母語話者も韓国語母語話者も全員が「無意識だった」、「意識していない」といった答えであった。この答えは、マイケル(1989)や水谷(1993)が指摘しているのと同じである。このように無意識的ではあっても、母語話者は発話や場面に即応し、談話を維持していく極めて高度な能力を持っている(マイケル1989)。しかし、学習者はそうはいかない。西坂(1995)は、人間は日ごろルールを参照しながら談話をしているのではない。それとは逆に日ごろ実際に交わっている談話を記述したものから、何かのルールがみえてくると指摘している。そのため、談話のやりとりを丹念に記述し、談話の過程を分析することが必要となる。

3. 本研究の目的

本研究では交わされた談話の記述により、相づち使用の実態を明らかにする。母語話者の相づち使用は場面や話し相手によって変化するかもしれない。変化するとするならばそれは何に起因しており、変化した結果としての相づちの諸相はどのようにになっているかを明らかにする。そうすることによって、接触場面になると母語話者が学習者とのコミュニケーションを維持していくためにどのような方略を使うか。なかでも、特に相づちはどのように活用されているかを明らかにする。具体的には、以下の3点を研究課題とする。

- (1) 日本語と韓国語の母語場面と接触場面における相づち使用の実態を明らかにする。
- (2) 日本語と韓国語の母語場面と接触場面との場面の違いによる相づちの異同を明らかにする。
- (3) 場面による変化があった場合、母語話者は談話スタイルをどのように変えていくのか、その変え方は何に起因するかを明らかにする。

4. 談話データ及び収集方法

本研究で分析する談話データ、収集方法は以下の通りである。

(1) 談話の参加者

- ① 日本語母語場面: 日本語母語話者10名(1対1の5組)、全員が東京都内のある国立大学大学院生、20代~40代の女性、初対面。全員が分析の対象。
- ② 韓国語母語場面: 韓国語母語話者10名(1対1の5組)、全員がソウル市内のある私立大学大学院生、20代~30代の女性、初対面。全員が分析の対象。
- ③ 日本語接触場面: 日本語母語話者10名と韓国人日本語学習者8名、参加者18名は、全員が東京都内のある国立大学大学院生または研究生。韓国人日本語学習者8名の日本語学習歴は2年から11年までで様々。全員が20代~40代の女性、初対面。母語話者1名と学習者1名が1組。合計10組のなかでの母語話者のみが分析の対象。
- ④ 韓国語接触場面: 韓国語母語話者7名と日本人韓国語学習者8名、韓国語母語話者は全員が東京都内のある国立大学大学院生または研究生。日本人韓国語学習者8名は全員、韓国民団が経営している東京都内の韓国学校で韓国語を学ぶ者。韓国語の学習歴は3年から9年までで、大学生、会社員、主婦などの20代~60代の女性、初対面。母語話者1名と学習者1名が1組。合計8組のなかでの母語話者のみが分析の対象。

(2) 収集方法

場所はそれぞれ学内の視聴覚室または教室で、各組ごとに話をしてもらった。収集方法は、何の選択肢も与えず調査者が参加者に20分間自由會話を行うようにし、調査者は視聴覚室または教室を出た。その後、各組のトピックはそれぞれ参加者2人が決めてから話を開始した。談話時間は各組とも20分前後であるが、各組によって多少の差があった。この談話をテープとビデオに収録した。談話終了後、調査者が視聴覚室または教室に入り、談話参加者にフォローアップインタビューを行った。フォローアップインタビューの方法は、まず、相づちの使用・不使用に對し、どのように感じるかについての意識を聞いた。次に、収録したばかりのビデオを参加者2人と調査者が一緒に見ながら、各場面の相づちに對するコメントや感想などを聞く、

いわゆる刺激回想法で行った。

5. 本研究における相づちの定義

本研究では、機能は相手の発話に對し5つの反応を示すもの、表現形式は「相づち詞」、出現位置は談話全体に觀察されるもの、を相づちと認める。その理由を以下、機能、表現形式、出現位置の順に述べる。

(1) 機能の捉え方

まず機能についてであるが、「先行研究における機能分類のまとめ」と「本研究で捉える機能」を示したのが表1である。

表1 先行研究と本研究における機能分類

先行研究における機能分類のまとめ	本研究で捉える機能
①聞いていることを示す	①聞いている
②わかったということを示す	
③情報の了解	②情報の了解
④同意を示す	③同意の表示
⑤感情の表出	④感情の表出
⑥否定の信号	
⑦間をもたせる	⑤間をもたせる
⑧發話權の交替	

「先行研究における機能分類のまとめ」には8つの機能がある。しかし、「本研究で捉える機能」では5つの機能になっている。このように5つの機能に絞った理由は、以下の通りである。

まず、表1の「先行研究における機能分類のまとめ」で挙げた①「聞いていることを示す」、②「わかったということを示す」は堀口(1997)も指摘しているように、2つの機能を同時にもつ場合が多く、どちらが主な機能であるかの判断が難しい。そのため、本研究では1つのカテゴリーとし「聞いている」とした。次に、表1の「先行研究における機能分類のまとめ」の⑥で挙げている「否定の信号」は取り上げない。なぜなら、⑥「否定の信号」の枠で本研究の4つの談話データ

を分析したら、それに該当するものがなかったためである。このような分析するデータと分析の観点との相互依存関係から、⑥「否定の信号」は除く。最後に、表1の「先行研究における機能分類のまとめ」の⑧で挙げている「発話権の交替」も、本研究では1つのカテゴリーとしては取り上げない。「発話権の交替」は畠(1982)とザトラウスキー(1991)が挙げていたが、畠(1982)の「私に発話させて下さい」、ザトラウスキー(1991)の「発話権の交替」機能は、相手の発話に対する反応を示すことに焦点をあてたというより、ターンの交替に焦点をあてた性質が強いと感じられる。発話権を交替する部分に現れる相づちは相手の発話に対する反応を示す機能とターンを交替する機能の2つが重複する場合が多い。そのため、この2つの機能がきれいに分けられるものではない。本研究では、「相手の発話に対する反応」をどのように示しているかに焦点をあてている。よって、相手の発話に対する反応を示しながらターンを交替している場合は、「発話権の交替」と分類せず、相手の発話に對しどのような反応を示す（例えば情報の了解など）かに重点を置いて分類する。従って、本研究での相づちの機能は、相手の発話に對し以下の5つの反応を示すものを、相づちであると認める。

- ① 「聞いている」：聞いているという信号を示すもの
- ② 「情報の了解」：相手が伝えた情報の了解を示すもの
- ③ 「同意の表示」：相手の話に同意・共感を表明するもの
- ④ 「感情の表出」：相手の話に感じた喜び、悲しみ、驚きなどを示すもの
- ⑤ 「間をもたせる」：次にどちらかが話し始めるまで余韻のように続けられるもの

(2) 表現形式の捉え方

次に、表現形式についてである。先行研究における相づちの表現形式は、非言語によるものと言語によるものの2つに大別できる。非言語によるものは、驚きの表情・スマイル（松田1988）、笑い（メイナード1987、黒崎1987）、うなずき（メイナード1987、水谷1988）、頭の横振り（メイナード1987）などが相づちとして扱われているが、このような非言語によるものを相づちとして扱うかどうかは研究者によってばらばらである。しかし、言語による「相づち詞」は、どの研究者もほぼ一致して扱っている。本研究では表現形式は「相づち詞」に限る。その第一の理由は、言語による「あ」、「うん」、「そう」、「そうですか」などの「相づち詞」はどの研究者もほぼ一致して相づちとして扱っているためである。第二の理由は、「あ」、「うん」、「そう」、「そうですか」などの「相づち詞」それ自体が一定の明確な意味論的意味を示すものではない。しかし、談話では頻繁に用いられ、特にコミュニケーションでは重要な機能を担っている。このようにコミュニケーションでは重要な機能を担っているにもかかわらず、それ自体が一定の意味論的意味を持たないため、学習者には理解しにくいものと考えられる。このようなものが談話でどのように使用されているかを把握することは言語教育に役立つものと考えられるため

ある。

(3) 出現位置の捉え方

最後に、出現位置についてである。先行研究での出現位置の捉え方は、大きく2つに分けることができる。それは狭義に捉える立場と廣義に捉える立場である。まず、相づちの出現位置を狭義に捉える立場は、水谷(1993)、メイナード(1993)、堀口(1997)が挙げられる。堀口(1997:42)は相づちの出現位置を「話し手が發話権を行使している間に、聞き手から送られた情報を共有したことを伝える表現という点では研究者の間で一致している」(以下、この位置を『聞き手から送られた』と示す)と述べている。この引用からも推察できるように、話し手が發話権を行使している間に「聞き手から送られた」ものを相づちとして扱うことにはどの研究者も一致している。この位置はこれまでの研究で扱われてきた相づちのなかでも典型的なものであり、現在までのほとんどの相づち研究はこの位置に関心を集中させてきた。

しかし近年、より廣い範囲にも相づちがあるのではないかという前提のもとに、その範囲が廣げられている。これらの研究は日本語の談話スタイルの輪郭を新たに浮かび上がらせることはもちろんのこと、出現位置に関してもまだ議論の余地が残されているという示唆を与え、相づち研究の更なる発展の可能性を切り開く貴重な立場に立っている。では、出現位置を狭義に捉える立場の研究者が指している「聞き手から送られた」位置と、出現位置を廣義に捉える立場の研究者が指している「聞き手から送られた」以外の位置とは談話のどの部分だろうか。その位置を具体的に把握するため、陳(2003)が提示している(例1)をみてみよう。

(例1)

1R: ほかの時はね

2C: ええ

3R: あのう 殆どいるでね

4C: ええ

5R: あのういいです電話 // XXXX

→6C: // ああ そうですか↓ はいじゃまたあのう・・・

陳(2003:105)

(例1)での2C「ええ」や4C「ええ」は話し手が發話権を行使している間に「聞き手から送られた」相づちである。これは「狭義に捉える立場」で述べたものであり、ほとんどの研究者が相づちとしてみなしてきたものである。これに對し、(例1)での6C「ああそうですか」は、その後に實質的な會話が續き發話権が移行している。そのため、話し手が發話権を行使している間に「聞き手から送られた」相づちとは言えなくなり、出現位置を狭義に捉える立場の研究では相づちとし

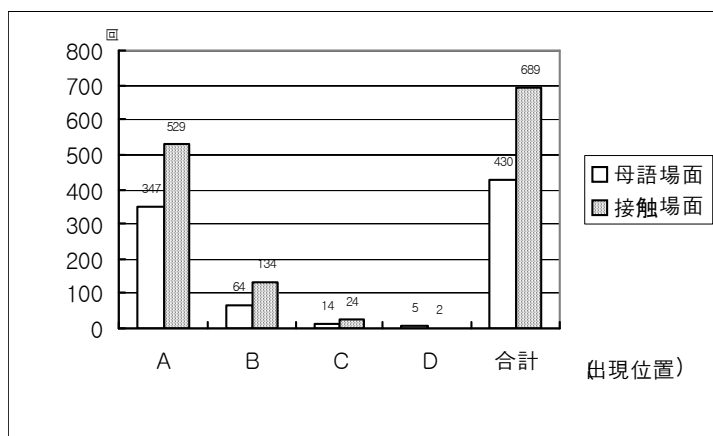
て扱われてこなかったものである。しかし、陳(2003)の研究ではこれを「あいづち」として扱っている。「聞き手から送られた」以外の位置とは、(例1)の6C「ああそうですか」のように、ターンを取る前に置く相づちである。このように相づちの出現位置についての轉換の動きがあり、出現位置の範囲を広げ始めるようになったが、その先驅に立ったのが伊藤(1993)である。これに小室(1995)、Clancyら(1996)、金(2002b)、陳(2003)、郭(2003、2004)の研究が続いている。これらの研究成果により、話し手が發話権を行使している間に「聞き手から送られた」以外の位置にも、相づちが存在するということが徐々に認められるようになった。

しかし、本研究では出現位置をさらに広げ、「談話全体に觀察されるもの」とする。なぜなら、談話というものが人間のふれあいの場で起こる言語行動であり、相づちはそこに現れる相手への配慮である。こう考えれば、狭義や廣義に捉える立場を越えた位置にも相づちが現れ、談話のどこにも現れる廣範囲の言語行動であることが推測される。にもかかわらず、出現位置を限定(聞き手から送られた位置、ターンの冒頭)すると、相づちの理解にも限界をもたらすことになる。よって、本研究ではこれまでの先行研究での相づちの出現位置を再考し、さらに擴張していく。そうすることにより、談話全体に使用されているありのままの相づちの姿が見え、相づちの全体像がより深く理解できるのではないかと考えられる。つまり、表現形式は「相づち詞」でありながら、機能は相手の發話に對し5つの反応を示すという条件を満たせば、談話のどの位置で觀察されるものであっても相づちとみなす。

6. 分析の結果

表2は日本語の母語場面と接觸場面を比較したもの、表3は韓國語の母語場面と接觸場面を比較したものである。表2と表3は、①まず、テープとビデオに収録した談話記録の文字おこしから、「相づち詞」に相當するものを取り出した。②「相づち詞」から、5つの機能(聞いている、情報の了解、同意の表示、感情の表出、間をもたせる)を果たしているものを相づちとして認めた。③①②の手順で取り出したものを出現位置別に分類したものである。

表2 日本語における母語場面と接触場面との比較



* 表2と表3の、實数は相づちの頻度、Aは「聞き手から送られた」位置、Bは「ターンの冒頭」、Cは「ターンの途中」、Dは「相づちに相づちが續く形」、である。

表3 韓国語における母語場面と接触場面との比較

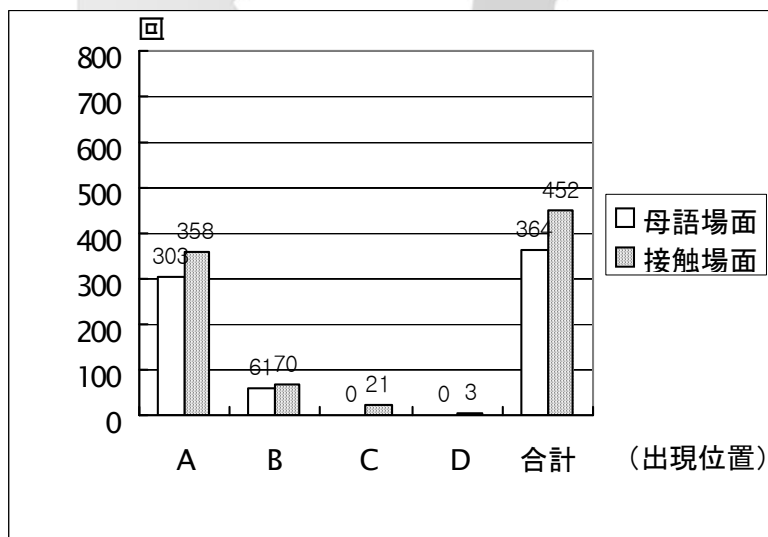


表2と表3をみると、韓国語の母語場面では出現位置がA、Bの2項目であるのに對し、接触場面になるとA、B、C、Dの4項目に広がっていく。また、頻度が高くなることについては、兩言語とも接触場面の全体的な相づちの頻度が高い。それを出現位置別にみても、日本語の母語場面の「相づちに相づちが續く形」を除けば、それ以外は兩言語とも接触場面の方がすべての

位置において高くなっている。そこから、場面が違ってくると母語話者が用いる相づちは日本語や韓国語とも変化すると言える。つまり、接触場面になると、相づち使用が多用になり、多様になると言える。ここで言う相づちの多用は、日本語のA、B、C、韓国語のA、B、C、Dの頻度が高くなっていることを意味する。また多様は出現位置が廣くなる（韓国語）現象が起きていることを意味する。

ではなぜ、接触場面になると母語話者の相づち使用が多用・多様になるのだろうか。それは、(1)話し相手が学習者であることから日本語能力の不足などを母語話者が認知した結果、それを補いながらコミュニケーションを維持していこうとし相づちを多用するため、(2)人間同士のコミュニケーションではどのような場面でも誤解は起こりうる。特に接触場面では文化の背景や母語での言語運用の仕方が異なる人間同士が接するがゆえに、誤解が常につきまといやすく、誤解から理解に至るまでの修復していく過程で相づちを多く使うため、(3)母語話者が談話をリードし、そのような自覚を持つようになった母語話者が談話を進めていくため相づちを多用・多様する、ということが考えられた。以下、これらのことについて接触場面でみられた例を示しながらみてる(紙面の関係上、日本語の例のみを示す)。

6.1 母語話者による發話の受け止め

次の(例2)は接触場面でみられた會話例である(以下、會話例のKは韓國人日本語學習者、Jは日本語母語話者を示す)。

(例2)

- 1K: いや ここで知り あいました
→2J: あ そうなんですか あ 今は なに するんですか
3K: 今 この 研究生 です
→4J: あ そうなの↑ あんまり お會いましたこと ないですね
5K: ええ そうですね 今は どう
6J: ○○さんと 同じ この 2年です いつ 日本に 來たんですか
7K: 去年の 四月 の前に
→8J: あ そうですか 去年の 四月
9K: 聞いて下さい 答え ます[から]

(日本語の接触場面データから)

(例2)は談話が始まり自己紹介が終わったばかりの部分である。母語話者が學習者に質問し答えさせ、その答え(1K)に對し、母語話者が2J「あそうなんですか」と、「ターンの冒頭」で「情報の了解」の相づちを打っている。4J、8Jも同じである。このように母語話者と學習者との談

話では、母語話者が「ターンの冒頭」に相づちを多く用いる傾向が見られた。このようになる原因として考えられるのは、話し相手が学習者であり、しかも、学習者の日本語の語彙や文法などの能力に限りがあることと関係していると思われる。(例2)をみると、母語話者が質問し学習者に答えさせているが、その答えは母語話者が相づちを打ちながら聞くほど長くない。そのため、「聞き手から送られた」位置に母語話者が相づちを挟むことは物理的に難しく、相づちを打つやいなや自分自身がターンを取らざる得なくなる。そこで、「ターンの冒頭」の相づちが増える。つまり、母語話者は学習者の語彙能力や文法などの不十分さを相づちで補い、よりよいコミュニケーションを図ろうとしている。しかし、相づちを打ちながら聞くという「共話」の談話スタイルが母語場面のように、聞き手と話し手の間でスムーズに作り出すことができない。そこで「ターンの冒頭」に相づちを用い、話し相手が發した先行發話に對する反応を示し、その上でターンを取り發話をしていく。このような状況が接触場面での「ターンの冒頭」という位置に相づちが多く用いられるメカニズムの一つであると推察される。

6.2 ミスコミュニケーションの修復

人間同士のコミュニケーションでは、どのような場面でも誤解は起こりうる。しかし、接触場面では文化の背景や母語での言語運用の仕方が異なる人間同士が接するがゆえに、誤解が常につきまといやすい。次の(例3)は、誤解が生じ、それが「ターンの冒頭」(6J、8J)や「ターンの途中」(2J、6J)の相づちの頻度を高くすることにつながると考えられる例である。

(例3)

- 1K: 昨日 なんか 神父さんに
→2J: 新婦さんか あ そうかそうか うん 相手ね 新婦さんね
3K: うん あの 説教するでしょう 説教
→4J: うんうん せき
5K: 説教 お説教
→6J: うん あ 神父さん あ やっぱり 神父さんね うんうん
7K: だから 教會で 式を 挙げたんだから
→8J: そうですね え そうなんだ ええ でも 二人とも あの

(日本語の接触場面データから)

「日本人は相手の言おうとすることがわからないときに『わかりません』、『どういう意味ですか』などと言わない」(松田1988:62)。(例3)でも、わからない旨を直接伝えるのではなく、相づちを用い確認しながら修正している。そのため、正しい理解に至るまで相づちの多用がみられている。(例3)での話題は教會で行われた結婚式についてである。「しんぶさん(新婦さん)」

と「しんぷさん（神父さん）」の誤解が生じたが、母語話者は自分の誤解に気づかず2J「あそうかそうかうん」と了解を示す相づちを打っている。学習者もまだ母語話者の誤解に気づかず話を進めている。母語話者もまだ自分の誤解に気づかず「新婦さん」のことだと思って4J「せき（籍）」と發する。ここで学習者は母語話者の誤解に気づき「説教お説教」と修正する。それを聞いて母語話者は正しく理解し、その反応として6J「うんあ」、「あ」、「うんうん」と何回も相づちを打っている。学習者は7Kで「神父さんである」理由を説明する。それに對し母語話者は8J「そうですね」と同意を示し、さらに8J「えそうなんだ」と、今までの情報に對する「情報の了解」を改めて示す。このように接触場面になると誤解が生じやすく、誤解から正しい理解に至るまでの修復過程で相づちが多く用いられている。

6.3 母語話者のフォロー

郭・菊池(1998)は日本語によるグループ討論では、最初に口火を切った人が討論の進行役になることを指摘している。本研究で分析した接触場面の談話データでも、日本語の場合は最初に口火を切ったのは10組中9組が母語話者であり、韓国語の場合は8組中7組が母語話者であった。また郭・菊池(1998)の指摘と同様、最初に口火を切った母語話者が進行役になり、談話をリードしていた。コミュニケーションに臨む人の心理状況や對處の姿勢は、談話で自分がどのような立場に立っているかによって変化する。談話の進行役を務めるという自覺を持つ母語話者は、コミュニケーションを円滑に進めていくために様々の方略を用いる。そうした方略の一つが相づちの多用であると考えられる。次の(例4)と(例5)は母語話者が学習者の發話をフォローするため、相づちを混ぜながら談話を進めている例である。

(例4)

- 1K: いろいろな事情 いろいろ違うし
 →2J: 働いてる人もいるし そうじゃない人もいるし うーん そうですね
 3K: うん そうなんです 同じ状況で なんか自分を理解してくださいとは
 (日本語の接触場面データから)

(例4)は、留學生の事情は人によってそれぞれ違うという学習者の話に、母語話者がさらに説明を付け加えた上で2J「うーんそうですね」と相づちを打っている。意味上のつながりをみると、2J「うーんそうですね」は相手の先行發話(1K)に對する同意だけでなく、2Jで自分が發した話の内容にも同意しているものと解釋できる。このように学習者が何かを話せば母語話者は話の進行を図るため、学習者が發した話の内容を補充しながら相づちを活用することが伺える。

(例5)

- 1K: あの 宗教に よって奥さんを何人
→2J: そうそう 宗教関係もあるし あの 宗教とか
3K: そうそう
4J: 関係あるけど民族とかね、 あの たくさん奥さんを
5K: 自由とか
→6J: そうそう 自由とか 全然制限ないとかね うんうん

(日本語の接触場面データから)

(例5)でも(例4)と同様、母語話者は自分の意見や考えを積極的に持ち出す発言はみられない。ただ単に、学習者が何かを話せばその内容を母語話者が補充し、相手の發話に關連付けながら談話を維持していく形である。接触場面では、このような母語話者が学習者の發話をフォローするような發話が目立つ。この談話スタイルが、接触場面で母語話者に相づちを多く用いさせ、それが場面による違いをもたらすと考える。

7. まとめ

本研究では、母語場面と接触場面との比較を通して、母語話者の相づち使用は場面や話し相手によって変化するか否か。変化するとしたら、その変化の要因にはどのようなものがあり、その要因によって変化した相づちの諸相はどのようなものかという変化の要因と変化の實相を検証した。

その結果、接触場面になると母語話者の相づちの頻度が高くなり、出現位置も廣くなること明らかになった。それは、1)話し相手が学習者であり日本語が充分でない場合、母語話者が相づちなどで補いながらコミュニケーションを維持していこうとするため、2)誤解が生じ、正しい理解に至るまでの修復の過程で相づちを多く混ぜるため、3)母語話者が談話をリードするようになり、その自覺を持った母語話者が談話を進めていくためのストラテジの一つとして相づちを多く用いるため、という側面から取り上げた。これらの要因によって、母語話者は母語場面より接触場面で相づちを多用するという、場面による相づち使用の違いがあることが明らかになった。出現位置は、話し手が發話權を行使している間に「聞き手から送られた」位置の相づちの頻度が最も高かった。この位置の相づちは、これまでの研究で言われてきた典型的な相づちであり、これ無しには相づちを語れないということはいうまでもない。

また接触場面では、「ターンの冒頭」や「ターンの途中」の相づちも母語場面より頻度も高かった。しかし、母語話者が相づちを様々な位置で用いながらいくらコミュニケーションを円滑に

図ろうとしても、そこに用いられる相づちがどんな意図で打たれた相づちであるかを学習者が察することができるかどうか問題となる。母語話者がなぜ相づちを打つのか、その意図を学習者が把握し理解できて、はじめて円滑なコミュニケーションが成り立つであろう。学習者が日本語を習い始めてから自然な日本語を身に付けるまでには、實に長い年月を要する。その間、学習者は「聞き手から送られた」位置はもちろんのこと、本研究の会話例で取り上げたような「ターンの冒頭」や「ターンの途中」の相づちにも接して来たと考えられる。話し相手や談話の状況によって多少の差はあるだろうが、本研究で分析した接触場面の相づち使用を考えると、学習者が常に広い範囲における相づちに接していることが十分推察できる。「聞き手から送られた」位置は、接触場面でも最も頻度が高く、この位置についての研究や教育が大事であることは言うまでもない。しかし、「ターンの冒頭」や「ターンの途中」の位置については、実際の談話場面で学習者が接する相づちと日本語研究や日本語教育で扱われている相づちとは、出現位置における隔りがあるように思われる。なぜなら、本研究の出現位置の捉え方で述べたように、日本語研究では相づちを廣義に解釋する立場の研究者によって、徐々に「ターンの冒頭」が相づちとして扱われている。しかし、まだこの位置の相づちがどのような機能を果たしているかを明らかにした研究はみられず、教育でも教えていないのが現状である。しかし、接触場面の相づちの分析の結果、「ターンの冒頭」で「情報の了解」の相づちを多用することが接触場面での特徴的な現象であるということが明なになった(例2)。特に、話し相手である学習者の日本語が十分でない場合に、母語話者が「ターンの冒頭」の相づちを多く使用していた。このような接触場面で使用されている相づちの實相を考慮すると、「ターンの冒頭」で使用されている相づちが、どういう機能を果たしているかについての具体的な例や談話の状況を学習者に提示する必要がある。そうすることによって、学習者が実際の談話で接する相づちと教育で扱われる相づちとの隔りがなくなり、学習者の日本語におけるコミュニケーションのより効果的な遂行につながると考えられる。

また、「ターンの途中」に相づちが存在することについて言及している研究は筆者が知る限りではまだみあたらず、それが教育に導入されていないことは言うまでもない。「ターンの途中」の相づちは、これまでの出現位置の枠組みに基づいて分析すると、相づちとして扱うことができないものである。しかし、「ターンの途中」の相づちも「相づち詞」でありながら、5つの機能を果たしているという、相づちの条件を満たしている。実際の談話と教育での出現位置の隔りによって、談話に沿った相づち教育に支障をきたらしてしまうのではないだろうか。それによって、談話の際に学習者は相づちが理解できないままコミュニケーションを続けてしまうという可能性も推測される。

相づちは場面や話し相手と密接に関係している。場面が変わると母語話者が用いる相づちは変容する。接触場面になると相づちが変容するにもかかわらず、母語場面の相づちしか教育の目標にして取り上げてこなかった今までの相づちの教育があまり現実的でないということを指

摘したい。より効果的な談話指導のためには、接触場面で広い範囲に相づちが使用されていることを視野に入れる必要もあると考えられる。

【参考文献】

- ・伊藤博子(1991)「対談番組における'Repair」、『日本語学』10巻6号 62-74
- ・伊藤博子(1993)「談話の指導－バックチャンネルからの展開－」、『日本語学』12巻3号 78-90
- ・岡崎敏雄(1987)「談話の指導－初～中級を中心に－」、『日本語教育』62号 165-178
- ・岡崎敏雄(1994)「コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化－日本人と外国人の日本語－」、『日本語学』13巻12号 60-73
- ・岡崎眸(1995)「日本語学習者における語用論上の轉移再考」、『東京外国語大学論集50』 97-109
- ・岡崎眸(2002)「内容重視の日本語教育－多言語多文化共生社会における日本語教育の視点から－」、『内容モデルに基づく日本語教育実習理論の構築』322-229 平成11-13年度科学研究費補助金研究基盤研究(C)(2) 研究成果報告書研究代表者岡崎眸
- ・生越直樹(1988)「朝鮮語のあいづち－韓国人レポートより－」、『日本語学』7巻2号 21-17
- ・生越直樹(1996)「各国語話者と日本人との誤解の事例－朝鮮語話者の場合－」、『国語国立研究所』3月58-100
- ・郭末任・他(1998)「ディスカッションにおける結論生成過程の日・韓・中比較」、『各国留學生と日本人學生による共同研究』4-15
- ・郭末任(2003)「自然談話に見られる相づちの表現」、『日語語教育』118号 47-56
- ・郭末任(2004)「相づちにおける出現位置の再考－日韓兩言語における母語場面と接触場面の分析を通して－」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻博士學位論文
- ・金志宣(2002b)「韓・日の會話におけるturn-takingと連鎖－大學生の討論を資料として－」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻博士學位論文
- ・黒崎良昭(1987)「談話進行上の相づちの運用と機能」、『国語学』150集5-28
- ・小室郁子(1995)「"Discussion"におけるTurn-taking－實態の把握と指導の重要性－」、『日本語教育』85号53-65
- ・ザトラウスキー・ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの考察－』くろしお出版
- ・陳姿菁(2003)「會話のプロセスにおけるあいづちの構造－日・台の電話會話の場合－」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本学専攻博士學位論文
- ・ネウストプニー, J.V.(2002)「インターアクションと日本語教育」、『日本語教育』112号 1-14
- ・畠弘巳(1982)「コミュニケーションのための日本語教育」、『月刊言語』11巻 13号
- ・堀口純子(1997)『日本語教育と會話分析』くろしお出版

- ・ 松田陽子(1988)「対話の日本語教育－あいづちに關連して－」『日本語學』7 卷12 号 59-66
- ・ 水谷信子(1984)「日本語教育と話し言葉の實態－あいづち分析－」『金田一春彦博士古希記念論文集第三卷言語學編』三省堂 261-279
- ・ 水谷信子(1993)「『共話』から『對話』へ」『日本語學』12 卷4 号4-10
- ・ メイナード・K・泉子(1993)『會話分析』くろしお出版
- ・ 和辻哲郎(1937)『倫理學上卷』岩波書店
- ・ Clancy, P.M., Thompson, S.A., Suzuki, R., & Tao,H.(1996).The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin, *Journal of Pragmatics*,26, 355-387.
- ・ Stubbs, M.(1983).*Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*. Basil Blackwell Ltd. (南出康世・内田聖二共譯1989.『談話分析』研究社 出版).

K C I

要 旨

本研究では相づちの定義を、表現形式は「相づち詞」、機能は相手の發話に對し、①「聞いている」、②「情報の了解」、③「同意の表示」、④「感情の表出」、⑤「間をもたせる」の5つの反応を示すものとした。分析の對象とした談話データは、①日本語母語話者同士の日本語による談話、②日本語母語話者と韓國人日本語學習者との日本語による談話、③韓國語母語話者同士の韓國語による談話、④韓國語母語話者と日本人韓國語學習者の韓國語による談話、の4つであった。この4つの場面における談話プロセスを記録し、その記録から、特に談話を維持していくために相づちはどのような役割を果たし、それが談話全体にどのように分布しているかを探った。

分析の結果、兩言語とも接觸場面になると母語場面より相づちの頻度が高くなっていた。このことから、兩言語とも母語話者は話し相手が學習者になると相づちを多く用いるということが明らかになった。また、そうなる要因も兩言語が類似していた。接觸場面になると母語場面より相づちの頻度が多くなる要因は、(1)母語話者による發話の受け止め、(2)ミスコミュニケーションの修復、(3)母語話者のフォローが考えられた。

キーワード：相づち、談話、母語話者、學習者、發話、頻度、コミュニケーション

투 고 : 2005. 5. 31
1차 심사 : 2005. 6. 11
2차 심사 : 2005. 7. 2

住 所 : (706-833) 대구시 수성구 수성3동 108-3
電 話 : 010-2512-6759
e-mail : malim22@hanmail.net